

「陶壘」による割れた陶磁器の新たな造形表現

-アートプロジェクトを通して見えた割れた陶磁器の作品価値-

東京藝術大学大学院 美術研究科 博士後期課程

美術専攻 工芸研究領域 (陶芸)

布下 翔基

要旨

本論は、陶磁器と乾漆の造形が融合した筆者の新たな造形表現を「陶壘（とうそく）」と定義すると同時に、この発想の背景にあるアートプロジェクトにおける割れた陶磁器の役割について論じるものである。

陶磁器には割れる性質があり、一般的に陶磁器が割れることはそのものの価値を失うことである。特に大量生産、大量消費が一般的に浸透した現代社会においては、割れた陶磁器の多くは産業廃棄物として廃棄されている現状がある。その一方、我が国では陶磁器と漆が密接な関わり合いを持ち、割れた陶磁器を漆によって修繕する文化が縄文時代から続いている。陶磁器と漆の関係は修繕に留まらず、土器に漆塗りを施した表現ともなり、「漆塗り土器」、「彩文土器」、「彩漆土器」などと呼ばれている。近代になると陶磁器と漆による表現は多様化をとげ、「陶胎漆器」の表現に括られる。しかし、これら従来の用語は陶磁器を胎として定義されている。すなわち胎が陶磁器に縛られていることを意味するが、現代においては、陶磁器と漆による新たな関係性からなる表現が課題となる。このような背景から本論では、陶磁器と乾漆の造形が対等な関係にあり、なおかつ相互に交差する「陶壘」によって、現代に新たな陶磁器と漆による表現を生み出すと同時に、割れた陶磁器が抱える現代社会の問題について新たなアプローチを追求した。

本論は3章からなる。まず第I章では陶磁器の割れる性質について、一般的な捉え方と筆者の考えについて物質的及び精神的側面から定義を行った。そのうえで自作

《embracing-damage-00-●》および《embracing-damage-00-●》を取り上げた。これらは、東日本大震災の余震によって意図せず割れた陶磁器に乾漆による造形を融合することで新たに作品として展開したものであり、筆者が「陶壘」によって制作した最も初期の作品である。以上の作品により、陶磁器の割れる性質についてネガティブからポジティブへ転換した筆者の思考の変化を記した。

第II章では、割れることについてのネガティブな思考からポジティブな思考へと展開した契機として、さらには「陶壘」に至るプロセスとして、アートプロジェクトの活動を記した。アートプロジェクトは、多数の参加者と協働して作品を作り上げるため、多様な視点で作品が創造される特徴がある。この活動において、割れた陶磁器を作品として展示し

た経験は、筆者が割れた陶磁器に乾漆の造形を組み合わせる作品を制作する転換点であり、「陶壘」の発想の原点である。本章では、割れた陶磁器の展示を行ったプロジェクト《WALKERS》、及びプロジェクト《香川の土に還る》を取り上げた。

第III章では、陶磁器と漆の造形が相互に交差し合う筆者の造形技法を「陶壘」と定義し、従来の定義との比較を行った。「壘」とは乾漆の古語であり、造形における陶磁器と漆の対等な関係を示す意味を込めた。そのうえで、博士学位審査提出作品《embracing-damage》の造形プロセスを追うことで、「陶壘」によって陶磁器と漆の造形が融合する過程を記し、造形が相互に交差する表現について述べた。また、博士学位審査提出作品における自然釉と螺鈿装飾に関係性をもたせた表現から、今後の陶磁器と漆による装飾表現の展開の可能性を示した。

結論として、陶磁器と乾漆の造形を融合した「陶壘」によって、領域を自由に行き交いする新たな表現を生み出すと同時に、大量生産や廃棄といった現代社会の抱える問題に対して新たな可能性を提示した。